

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：33919

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K13284

研究課題名（和文）自閉スペクトラム症グレーゾーン者のサポートに資する社会心理学的アプローチ

研究課題名（英文）Social psychological approach to support for autism spectrum disorder "gray zone"

研究代表者

原田 知佳（Harada, Chika）

名城大学・人間学部・准教授

研究者番号：00632267

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：他者感情推測が苦手な学生は、グループ作業時に「相手の意見を否定しないというルール」の導入要求が示されること、傾聴が促される環境下で発言しやすいと感じることが確認された。ASD者は自分自身の能力不足や失敗への不安を感じやすいことから、安心して発言できる環境がグレーゾーン者の良好なパフォーマンスに繋がる可能性があり、職場集団を対象とした研究でもそのことが確認された。職場集団では、心理的安全性が高ければ、メンバーの社会性が低くても集団パフォーマンスの低下に結びつかないことが確認された。また、対人関係上の困難を抱える中学生には、感情の整理・対処・相談理解に関する教授が相談の負担感を減弱させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、他者の感情推測や対人関係で困難さを抱える人たちに焦点を当て、学校現場（中学校、大学）や企業現場など複数のフィールドで調査を行うことによって、どういったサポートが有効かを多角的に検証した。他者感情推測が苦手な学生が小集団活動時に感じる困難さやサポート要求を明らかにした点、職場集団においてメンバーの社会性が集団パフォーマンスに及ぼす影響を心理的安全性が調整していることを明らかにした点、ASD傾向の高い女性の自殺率の高さに注目が集まっている中で、女子中学生への自殺予防教育プログラムの効果検証を行い、一定の効果と留意点を明らかにした点は、いずれも社会的・学術的意義が高いといえる。

研究成果の概要（英文）：It was confirmed that students who are not good at inferring the feelings of others want the "rule of not denying others' opinions" to be introduced during group work, and that they feel more comfortable speaking up in an environment where listening is encouraged. This was also confirmed in a study conducted on a workplace group. In the workplace group, it was confirmed that a high level of psychological safety does not lead to a decline in group performance, even if members' social skills are low. In addition, for junior high school students with interpersonal difficulties, teaching about emotional management, coping, and understanding counseling decreased the burden of counseling.

研究分野：社会心理学

キーワード：自閉スペクトラム症 グレーゾーン 自己制御 感情推測 集団 心理的安全性 社会性 自殺予防

### 1. 研究開始当初の背景

現在、教育現場では、発達障害の診断は受けていないものの、その境界にいる子どもや、通常学級に在籍する発達障害の疑いのある子どもなど、グレーゾーンと呼ばれる児童・生徒・学生への支援に悩む教員が増えている(矢野他, 2015)。同時に、企業現場においても、グレーゾーンの上司・部下の対応に悩む組織が増えており、「大人の発達障害」「女性の発達障害」「職場と発達障害」というキーワードを含む書籍も増えてきた。発達障害については様々な分野で研究が進められているが、発達障害者の認知・行動や神経基盤・遺伝子に焦点を当てた研究が多く、とりわけグレーゾーン者の集団内での振る舞いや、グレーゾーン者が集団の中で活躍するための環境づくりに資するアプローチについては焦点が当てられていない。本研究では、自閉スペクトラム症グレーゾーン者の小集団活動に焦点を当て、次の2点を解明する。第1に、グレーゾーン者の特徴である感情読み取り能力や自己制御能力の低さが、集団パフォーマンスを抑制するメカニズムを同定する。第2に、感情読み取り能力や自己制御能力の低いグループに対する支援的介入を検討する。

研究開始当初は主に教育現場に焦点を当てて研究を実施する予定であったが、コロナ禍で研究活動が一部制限されたため、フィールドを企業現場にも広げて検証を行った。

### 2. 研究の目的

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; ASD) は、社会性、すなわち他者と円滑に相互作用をする能力に深刻な問題を抱える発達障害である(高橋・宮崎, 2011)。ASDは、他者の顔や目から感情を読み取ることや (Baron-Cohen et al., 1997)、社会的場面に応じた行動制御に困難を抱える (Jahromi et al., 2013)。一方で、ASDの認知的特徴は能力の強みとなり得る可能性も指摘されており (Motttron, 2011)、例えば、文脈と無関係な局所への注意を必要とする処理に長けていることが報告されている (田中・神尾, 2007)。こうした ASD の能力の強みが集団内でも発揮されれば、優れた集団パフォーマンスに繋がる可能性が推測されるが、ASD の社会性の特徴である感情読み取り能力 (social sensitivity; 社会的感受性) や自己制御能力の低さが集団パフォーマンスに負の影響を与えることが報告されている (Wooley et al., 2010; 原田・土屋, 投稿中)。

では、どういったサポートがあれば、ASD や ASD グレーゾーン者は集団内で優れたパフォーマンスを発揮できるのであろうか。社会的感受性や自己制御能力の低さが持つパフォーマンスの抑制効果を緩和するためには、どういった支援的介入が効果的なのだろうか。本研究では、こうした問いに対して、次の3つの検証から解明を試みる。まず、第1に、社会的感受性や自己制御能力の低さが集団パフォーマンスを抑制するメカニズムを同定する。第2に、社会的感受性や自己制御能力の低いメンバーが要求するサポートの在り方を検討する。第3に、グレーゾーン者に効果的な支援的介入の在り方を検討する。



Figure 1 本研究の概略図

### 3. 研究の方法

#### 研究1: 社会的感受性や自己制御の低さが集団パフォーマンスを抑制するメカニズムの同定

大学生を対象に、3名×50~60グループに、創造性課題 (Guilford, 1959) や三段論法課題 (Shikishima et al., 2009) などの課題を集団で取り組ませ、そこでのメンバー同士の相互作用について、360度の撮影が可能なカメラを用いて録画した。各課題については、奇数番号を個人課題、偶数番号を集団課題として実施させることにより、個人の成績も把握できるようにした。同時に、社会的感受性、自己制御、実行機能、パーソナリティ指標を収集し、メンバー個人のIQを統制した上で、集団パフォーマンスの予測因の検証を行った。

ほぼ初対面の大学生メンバーで構成される小集団を対象に実験室で収集したデータと、実際の企業組織にて継続的な活動を続けているチームを対象に収集したデータを比較するために、大手食品会社開発部門に所属する120名、23チーム (Range = 3-8人) を対象に調査を実施した。社会的感受性、自己制御、心理的安全性、上司マネジメント等の指標を収集し、上司評定および本人評定のチームパフォーマンス指標との関連を検討した。

#### 研究2: サポート要求の検討

大学生を対象に、ASD傾向と小集団活動時のサポート要求 (自由記述および質問紙)、発言抑制要因等を複数回調査し、他者感情の読み取りが苦手学生のサポート要求を検討した。

#### 研究3: ASD グレーゾーン者に効果的な支援的介入の検討

これまでの研究結果より、ASD傾向が高い学生は安心して発言できる環境が良好なパフォーマンスにつながる可能性があること、相手と距離を保つために小集団活動時に発言を抑制する傾向が確認されていた。一方で、近年、ASD傾向の高い女性の希死念慮、自殺未遂、自殺率の高

さが懸念されはじめてきている。学校現場で実施できる自殺予防プログラム GRIP は、自殺予防への効果だけでなく、グループワークを活用することで、学級への所属感や級友に対する話しやすさ、クラス全体の良好な雰囲気につながることを確認されている。このことから、女子中学生を対象に、自殺予防プログラム GRIP を実施することで、自殺予防や学校での級友の間での発言のしやすさに繋がる可能性を検証した。

#### 4. 研究成果

##### 研究1：社会的感受性や自己制御の低さが集団パフォーマンスを抑制するメカニズムの同定

【1-1】大学生対象の実験データをもとに、メンバー個人のIQを統制しても、社会的感受性、自己制御、チームパーソナリティが集団パフォーマンスを予測するか否かを検討した。分析の結果、個人IQを統制してもなお、ビッグファイブの開放性、自己主張、セルフコントロール、実行機能が集団パフォーマンスを予測した一方で、社会的感受性は予測因として残らなかった。社会的感受性よりもパーソナリティ変数や自己制御指標の方が集団パフォーマンスの予測力が強い可能性が示唆された。ただし、メンバー全員の合意形成が必要となる課題とメンバーの誰かが正解にたどり着けばよいようなRaven's課題とでは、自己主張の影響が異なり、前者は課題に対して正の、後者は課題に対して負の影響を及ぼしていた。

【1-2】自己制御と社会的感受性が高いチームが良好なパフォーマンスを示すことを示した大学生対象の実験結果が、社会人企業チームにおいても示されるか否かを検討した。社会的感受性も自己制御もともに高いチームは新規取組への上司評価が高かった点は一時的に形成された大学生チーム(原田・土屋, 2019)と同様の結果であるものの、社会性指標に偏りがあるチームにおいても高いパフォーマンスが示されており、社会的安全性が社会的感受性の調整効果を示すことが明らかとなった。

【1-3】チームにおけるリーダーとフォロワーの目標遂行行動について、制御焦点に基づく検討を行った結果、互いの特徴を補い合う形で自己制御行動をとることが優れたパフォーマンスにつながる可能性が確認された。具体的には、上司が評定する新規課題に取り組む程度は、メンバーが職場で促進焦点方略を使用している(e.g., 成功のためならリスクを取る)なら、リーダーは予防焦点方略(e.g., 失敗を避けるために注意を集中する)を使用したほうが高く、リーダーが職場で促進焦点方略を使用しているなら、メンバーは予防焦点方略を使用したほうが高いことが確認され、制御「不適合」の利点を明らかにした。

【1-4】企業組織のビジネスチームを対象とした研究では、チーム内のコミュニケーションが目標への共同を促進するといったチーム・プロセスを経て、チーム・パフォーマンスの向上に結びつくことを報告している。しかし、チーム・プロセスの先行要因については実証的検証が少ないことから、その点を検討した。チームレベルの関連を検討した結果、チームの心理的安全性は、チーム・プロセス(コミュニケーション・目標協働)やチームパフォーマンス(適切対応・新規課題への取り組み)と正の関連が示された。また、チームの自己主張はコミュニケーションと、自己抑制は適切対応と正の関連が示された。個人レベルの影響過程を見るために、上司のマネジメント、心理的安全性および社会的感受性、社会的自己制御がチーム・プロセスの2側面それぞれに影響し、結果としてパフォーマンスに結びつくというモデルを検証した。分析の結果、心理的安全性はコミュニケーションへ強く影響している一方で、上司のマネジメントは目標協働へ強く影響していた。

##### 研究2：サポート要求の検討

【2-1】社会的感受性(目から感情を読み取る能力)の低いASDグレーゾーン学生が、小集団活動時に感じる困難さやサポート要求を検討した。分析の結果、社会的感受性が低いほど、「発言のしにくさ」「他者の意見を受け入れられない」「過剰な主張」「他者への同調」といった点で困難さを感じている傾向にあることが確認された。また、社会的感受性が低い者に特徴的な回答として、「相手の意見を否定しないというルール」の導入要求があることが確認された。

【2-2】2-1の結果は自由記述結果をもとに見いだされた結果であり、本人が気づいていないサポート環境など、自由記述では測定できない部分が検討できていなかった。そこで、小集団活動時に発言しやすい環境に関する質問項目を作成した上で、他者感情推測能力の高低によって発言しやすい環境が異なるか否かを検討した。その結果、他者感情推測が苦手な学生は、得意な学生と比べて、傾聴が促される環境下で発言がしやすいと感じていることが確認された。ASD者は自分自身の能力不足や失敗への不安を感じやすいことから、安心して発言できる環境がASDグレーゾーン者の良好なパフォーマンスに繋がる可能性がある。

【2-3】研究1のデータより、ASD傾向が高いほど小集団活動時の発言量が少ないことが確認されていたため、なぜ発言が抑制されるかについての検討を行った。その結果、ASD傾向が高い者は、小集団活動時に、自分のスキル不足により発言できないと認知しているわけではなく、相手と距離を保つために発言しないと認知している傾向があること、また、相手に配慮した発言抑制ができない(相手に配慮せずに発言をしてしまう)と認知していることが示唆された。

##### 研究3：ASDグレーゾーン者に効果的な支援的介入の検討

【3-1】自己制御が最も失敗しやすい時期は、刺激希求が最も敏感であるにも関わらず、衝動

抑制が発達途中にある青年期であることが指摘されている。そこで、支援的介入を行う前提として、自己制御の発達の变化を明らかにするために、中学1年生から3年生までの縦断データをもとにして、個人内・個人間変動を検証した。具体的には、友人・教師とのかわりが社会的自己制御（SSR；社会的場面で、個人の欲求や意思と現状認知との間でズレが起こったときに、内的基準・外的基準の必要性に応じて自己を主張する、もしくは、抑制する能力）に及ぼす影響について、CLPM（交差遅延パネルモデル）で個人間関係を、RI-CLPM（ランダム切片交差遅延パネルモデル）で個人内関係を検証した。友人とのポジティブな関わりは自己主張や持続的対処・根気に対して正の影響を及ぼしており、自己主張については個人内と個人間で同様の結果が示された。教師のM機能（配慮・親近）は、中1から中2でSSRに対して正の影響が確認され、自己主張と持続的対処・根気については個人内関係でも同様のパスが確認された。中1は小学校から中学校の移行期で問題行動が顕在化しやすい時期であるため、生徒の気持ちを理解したり、相談に応じたり等、教師の配慮が重要になる可能性がある。SSRから友人・教師への影響も確認され、生徒のSSRに応じて友人や教師が関わっている可能性も示唆された。

【3-2】女子中学生を対象に、感情整理・分析、対処法の理解・習得、相談の理解・体験を含む教育プログラムGRIPを実施し、教師評定によって収集した生徒のASD傾向が高い群にプログラムの効果が示されるか否かを検証した。5回の授業ごとにASD高群においても感情理解・伝達・対処法や友人・大人への相談行動に関わるスキルの上昇がみられたものの、統計的に有意なスキルの上昇は確認できなかった。一方で、自己評定で収集した対人関係上の困難さの指標をもとに効果検証を行うと、対人関係上の困難を抱える中学生に対しては、相談への負担感が減弱する可能性が示唆された。ASD傾向が高い生徒に対しては、集団教育に加えて個別対応の必要性が示唆されたものの、GRIPを実施することで周囲（クラス）がハイリスク生徒をサポートできることに結び付く可能性も十分に想定できることから、集団への効果と個人への効果を切り分けて考える必要性が示唆された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 Ge Fiona, Syropoulos Stylianos, Gensler Julian, Leidner Bernhard, Loughnan Steve, Chang Jen-Ho, Harada Chika, Mari Silvia, Paladino Maria P., Shi Junqi, Yeung Victoria W. L., Kuo Chun-Yu, Tsuchiya Koji	4. 巻 56
2. 論文標題 Constructivist Self-Construal: A Cross-Cultural Comparison	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Cross-Cultural Research	6. 最初と最後の頁 29～61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/10693971211055276	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Tsuchiya Koji, Kashima Yoshihisa, Yoshida Toshikazu, Harada Chika, Igarashi Tasuku	4. 巻 64
2. 論文標題 Processes of Social Influence on Sampling Behavior: The Effect of Other's Positive Attitude and Receiver's Prior Experience	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 64～72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jpr.12314	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Yoshizawa Hiroyuki, Yoshida Toshikazu, Park Hyun Jung, Nakajima Makoto, Ozeki Miki, Harada Chika	4. 巻 62
2. 論文標題 Cross cultural Protective Effects of Neighborhood Collective Efficacy on Antisocial Behaviors: Mediating Role of Social Information Processing	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 116～130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jpr.12266	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 原田 知佳、土屋 耕治	4. 巻 35
2. 論文標題 社会性と集団パフォーマンス：他者の感情理解と自己制御に着目したマルチレベル分析による検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 1～10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14966/jssp.1720	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 土屋耕治・原田知佳	4. 巻 1
2. 論文標題 平成30年度「子供の性被害防止アンケート」調査分析報告書	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 愛知県警察本部少年課報告書	6. 最初と最後の頁 1～20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原田 知佳・畑中 美穂・川野 健治・勝又 陽太郎・川島 大輔・荘島 幸子・白神 敬介・川本 静香	4. 巻 90
2. 論文標題 中学生の潜在的ハイリスク群に対する自殺予防プログラムの効果	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 351～359
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.90.18004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 土屋耕治・和田真波・原田知佳	4. 巻 18
2. 論文標題 社会的感受性と身体活動を伴う小集団の課題パフォーマンス：ブロック積み上げ課題を用いた検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間関係研究	6. 最初と最後の頁 38-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15119/00002660	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉澤 寛之, 吉田 俊和, 中島 誠, 吉田 琢哉, 原田 知佳	4. 巻 45
2. 論文標題 地域住民の関与・雰囲気が集合的有能感を介して子どもの反社会性に及ぼす影響 層化抽出法を用いたマルチレベル分析による検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 応用心理学研究	6. 最初と最後の頁 35-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24651/oushinken.45.1_35	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 玉井颯一・吉田琢哉・原田知佳・吉澤寛之・浅野良輔・吉田俊和	4. 巻 12
2. 論文標題 仲間関係と教師の指導が中学生の共感性に及ぼす影響 2時点の縦断データに基づく検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東海心理学研究	6. 最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57549/tjp.12.0_47	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件(うち招待講演 1件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 原田知佳・吉澤寛之・吉田琢哉・浅野良輔・玉井颯一
2. 発表標題 友人・教師との関わりが社会的自己制御に及ぼす発達の影響：中学3年間の縦断データを用いたCLPMとRI-CLPMの比較検証
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 原田知佳・川原日和
2. 発表標題 代理羞恥の日独比較および規定因と適応的機能の検討
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 原田知佳・土屋耕治
2. 発表標題 高業績を導くチーム・プロセスの先行要因：心理的安全・上司マネジメント・メンバーの自己制御機能に着目して
3. 学会等名 産業・組織心理学会第38回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 野崎優樹・西川一・原田知佳・渡邊芳之
2. 発表標題 経常的研究交流委員会企画 パーソナリティ研究から見た非認知能力
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第31回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 杉山陽香・古賀佳樹・川島大輔・原田知佳・畑中美穂・山脇望美・川野健治
2. 発表標題 対人関係上の困難を抱える生徒への自殺予防プログラムGRIPの効果ー女子中学生を対象として
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第31回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 原田知佳・土屋耕治
2. 発表標題 職場チームの心理的安全性はメンバーの社会性の影響を調整するか
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 原田知佳
2. 発表標題 スクールカースト地位といじめ被害・加害経験および自己制御との関連
3. 学会等名 日本教育心理学会第64回総会
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 原田知佳・土屋耕治・森口佑介
2. 発表標題 実行機能と自己制御は集団パフォーマンスを予測するかーメンバーのIQを統制した検討ー
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原田知佳・川島大輔・畑中美穂・山脇望美・古賀佳樹・川野健治
2. 発表標題 SDグレーゾーン生徒に対する自殺予防プログラムGRIPの効果ー女子中学生を対象としてー
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原田知佳・土屋耕治
2. 発表標題 リーダーとメンバーの目標志向行動が相補的だとパフォーマンスが高くなる？：職場における制御焦点の交互作用効果
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoshizawa, H., Yoshida, T., Harada, C., Asano, R., Tamai, R., & Yoshida, T.
2. 発表標題 Longitudinal transition of comprehensive microsystems profile and adolescent sociocognitive development.
3. 学会等名 Poster session presented at the 21th annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology, New Orleans, LA. (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yoshizawa, H., Yoshida, T., Harada, C., Asano, R., Tamai, R., & Yoshida, T.
2. 発表標題 Cumulative effects of socialization agents on youths' development of antisocial cognitive biases.
3. 学会等名 Poster session presented at the 22nd Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology. Virtual, USA. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和
2. 発表標題 社会化エージェントの多層的影響に関する研究(29) エージェント潜在クラスが中学生の共感性に及ぼす因果的影響の再分析
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和
2. 発表標題 社会化エージェントの多層的影響に関する研究(30) エージェント潜在クラスが中学生の反社会性に及ぼす因果的影響の再分析
3. 学会等名 日本社会心理学会第61回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 原田知佳・土屋耕治
2. 発表標題 他者感情推測が苦手な学生が小集団活動時に発言しやすい環境
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会発表論文集
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田知佳・土屋耕治
2. 発表標題 ASDグレーゾーン学生が認知する小集団活動時の発言抑制原因
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田知佳・土屋耕治
2. 発表標題 ASDグレーゾーン学生における小集団活動のサポート要求
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田知佳・土屋耕治
2. 発表標題 ASDグレーゾーン学生が認知する小集団活動の困難さとそのサポート要求
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 有光 興記、飯田 沙依亜、榊原 良太、手塚 洋介、森岡 陽介、金子 迪大、村田 明日香、原田 知佳ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 432
3. 書名 感情制御ハンドブック	

1. 著者名 日本応用心理学会、応用心理学ハンドブック編集委員会、藤田 圭一、古屋 健、角山 剛、谷口 泰富、深澤 伸幸	4. 発行年 2022年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 858
3. 書名 応用心理学ハンドブック	

1. 著者名 松下正明、神庭重信、三村 将 (編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中山書店	5. 総ページ数 448
3. 書名 不安または恐怖関連症群 強迫症 ストレス関連症群 パーソナリティ症	

1. 著者名 小塩 真司、川本 哲也、竹橋 洋毅、原田 知佳、西川 一二、平山 るみ、外山 美樹、千島 雄太、野崎 優樹、中川 威、登張 真穂、箕浦 有希久、有光 興記、石川 遥至、平野 真理、小野寺 敦子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 非認知能力	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------